

カリタス女子中学校 第一回入学試験

二〇二〇年二月一日（午前）実施

国語問題

（五〇分）

* 答えはすべて解答用紙に記入すること。

* 字数の指定がある場合は、句読点や記号をふくむこととします。

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

声は言葉を伝え、人や社会とコミュニケーションをとるための直接的な手段ですから、欧米では「どのように自分の思いを伝えるのか」をきちんと教えます。それが何より最初に行われるべき教育の基礎Aなのです。その土台ができた上で知識や技能を学び、自分の好みや才能を見極め、「自分が人間として何をしたいのか」を表現していく。声はそのためにあるといつても①過言ではありません。

しかし日本では、幼稚園や保育園の頃から、大人の号令にあわせて「大きな声で、みんなと揃えて」声を出すようにしつけられます。そしてそれは小学校に入るとさらに強力になります。国語の音読などは本来、まずはどのように声を出すかというところから指導をはじめ、楽しんで読み、楽しんで聞ける、そういう音読を目指すべきだと思うのですが、「大きな声ではつきりと！」としか言われないうとうでしょう。間違えたら叱られたり、笑われたりして、子どもたちは「失敗しないように」と、それしか考えられなくなってしまう。これでは生き生きとした日本語や物語への興味を失わせ、音読がただの苦痛でしかなくなってしまう。どんな声で読みたいのか、そんなことは誰も考えません。個性を押し殺し目立たないように、間違えないで他の人と同列に並ぶように。そうやって子どもたちは自分の声を抑圧していきます。それでは声を出すことが楽しいと思えるわけがありません。

〈 中 略 〉

録音して聴いた自分の声は、普段から出している声、人に聴かせている声です。しかし残念なことに、その声は多くの場合、その人の良いところが失われていたり、作り声であったりします。まるで別人であるかのように振る舞う声、不自然に抑圧された声、生き生きとした個性が感じられない声、話すことが苦痛でしかないような声など。これでは当然ながら、声の力を活かすことができません。しかし、そのような声の裏には、その人の人生の善きものを豊かに含み、計り知れないパワーを持った声カが隠れています。

その声を見つけ出すこと、そしてそれを「心身からの」喜びを持って使えること、それが声の力を使うということです。その声は「本物の声」と言うべきもので、普段、自分が骨導音で聴いている声や、人に聴こえている声とも違います。

C録音した自分の声を嫌だなど思うのは、普段自分が聴いている骨導音ではないので違和感がある、という理由だけではありません。もっと本能的な、身体の底から湧き上がるような嫌悪があるのではないのでしょうか。それはじつのところ、本物の声ではないからです。では、本物の声とは何か。それは「その人の心身の恒常性に適った声」のことです。

どういうことか、まずは恒常性ということについて説明しましょう。

生体における恒常性とは、ひと言でいえば「人間の心身を正常で健康な状態に安定させる仕組み」のことです。これは人間だけでなく生物が皆持っている機能です。この働きによって私たちは心身を健全に維持することができず。

1、暑いと体温を一定に保つために汗をかきますね。汗が出ないと熱中症になって、ひどくなると生命にかかります。感覚的にも「暑い」と感じられるので、私たちは涼しい場所に移動したり水を飲んだりするといった行動をとります。急に寒くなれば身震いをして体温を上げようとしますし、毛穴を収縮させて鳥肌がたちます。無意識に手をこすって摩擦熱で温めようともするでしょう。血圧は必要に応じて上がったたり下がったりします。そのように細かく見ていけば何千という反応が身体を健康に保つためにほぼ自動的に行われているのです。

人間以外の動物は、この恒常性がそれぞれの生物の特性にしたがって完璧に近い状態で働いています。しかし人間は社会が複雑になった今、ときとして恒常性に反したことをしてでも社会に適応しなくてはなりません。どんなに暑い屋外の仕事であっても、仕事を放り出して涼しいところに行ってしまうわけにはいかないし、裸になって水浴びなどできない。熱が出て節々が痛くて動けないとき、身体が「寝ていなさい」というサインを出しているのに、学校や仕事があるからと休めない。

そうやって身体の機能に反するだけでなく、心理面でも人間は無理をします。いやだと思つくと、身体はそれを回避するためにストレスホルモンを出します。ストレスホルモンはイライラするなどの精神的な反応にとどまらず、頭痛や胃痛や下痢なども引き起こします。それを感じ取つていやなことから逃れればいいのですが、それでは社会生活は送れません。2 パンクするまで我慢して頑張つてしまつたりもするのですね。

さて、声とは生命活動のためのさまざまな身体機能を使って出されるものだということを前に述べましたね。つまり、声にも恒常性維持の働きは強く関わっているのです。

姿勢が悪かったり、喉の声帯周りを締めつけたり、声道を圧迫したり、あるいは精神的に緊張やストレスがかかつたりすると、本来の身体の状態から外れ、その声は「健康で安全な状態であろうとする」あなた自身の心身を痛めつけます。

社会に、周りの人々に適応しようとして、自分を少しでもよく見せようとして無意識に声を作る。そんな作り声が続けると、心身に不調をきたすのです。それは「呼吸がちゃんとできていない」「姿勢が苦しい」「喉をそんなに締め付けないで」と、身体が③ ケイコク

を発しているのです。

※前の章で、自分の声を録音して分析した女性が「話した後になにか **E** 罪悪感がある」と言っていたことを思い出していただきたいのですが、これは心身に無理をさせて作り声を出している彼女に対して、彼女の脳が「その声は間違い。早く気づいて」と教えているサインなのです。出した声は、声を出すために使ったそれぞれの **④** キカンの使い方とともに、脳を巡ります。そこで心身の司令塔である脳がチェックをして、いわゆる「ダメ出し」をしているのですが、多くの人はそれに気づきません。そのサインに気づき「罪悪感」という言葉で表現した彼女は、聴覚も身体感覚もとても敏感です。

心身は一体です。身体が無理をすれば精神にも影響し、精神が蝕まれば身体の機能もバランスを保てなくなる。 **3** 身体にも精神にも大きく関わる声にアプローチしようという発想は、残念なことに日本ではまずありません。

「本物の声」とは恒常性に適った声。であれば、偽りの声は心身を蝕み、本物の声は心と身体にプラスの影響を与えることは自明でしょう。本物の声は自分に対してプラスに働いただけでなく、人の心をも「声に出ている心身の真实性」ゆえに動かすのです。先に話題に挙げた、甲本ヒロトさんの歌声に多くの人が惹かれる理由は、ここにあるのだと思います。

「声に出ている心身の真实性」ということについて、もう少し説明したいと思います。

人の在り方として、信頼がおけるものはなんでしょうか。社会的には人を騙さないとか嘘をつかないとかいろいろあるでしょうが、それはまた別の話です。人間という生命体として見た場合、信頼できるものとは心身の恒常性であり、誰もが持っている「生きようとする力」です。それは間違いなく「真」であり「善」です。でなければ、生命を維持することはできないのですから。私たちは心身の恒常性という確実性によってのみ生きられるのです。その確実性にもとづいて、目的を持って心身を使うことが「活かす」ということです。

その確実性、信頼がおけるもの、心身の真实性という意味で、私は（日本語には対応する言葉がないので）「オーセンティシティ」という言葉を使いますが、人は相手のオーセンティシティを感じ取ったときには、無視などできないし、心を開かざるを得ません。その音声——その人の心身の真实性が出ている本物の声のことを、私は「オーセンティック・ヴォイス」と呼んでいます。それはその人の恒常性に適って心身がもっとも自然な状態で出される、その人の命そのものであり、その人自身の尊厳とさえ言えるものです。

作り声や周囲に迎合する声は、頑張れば頑張るほど真实性から離れていきます。いくらかわいらしい声を出していても、 **4** 誠実さをアピールしても、できる人ふうの声を出してみても、そこには必ず「真实性とかけはなれたもの」が透けて聞こえてしまいます。

言葉ではなく、容姿でもなく、声の真実性が人の判断を左右し、心を動かすのは、聴覚が受け取った「本物の声（オーセンティック・ヴォイス）」が、脳内で本能を司る旧皮質へと届くからです。それが聞き手の感情を揺り動かし「有無を言わせぬ影響」を与えるのです。人の心に届かない声とは、大脳辺縁系（旧皮質）が無視、あるいは拒否してしまふ声です。恒常性に適った真実性のある声は心を動かし、作り声や自分を生きていない声は、心に届かない。それはあたかも原始脳の奥深くで、人間という生物種がこれからも生きのびていくために、「恒常性を失わずに生きていくかどうか」を判定しているかのようです。

〈山崎広子『声のサイエンス』（NHK出版新書）より〉

〔語注〕

- ※ 骨導音……………声帯（左の注を参照）の振動が、空気を通さず、頭の骨を伝わることでとらえられる音。
- ※ 前に述べましたね……………問題文として取り上げた部分より前の章で、私たちは声を出すための専用の部分を持つておらず、身体のままさまざまな機能を利用して声を出している、と説明している。
- ※ 声帯……………喉ぼとけの内側にある、声のもとになる音を出すための部分。これが振動して音を出し、それが身体に響くことによって声になる。
- ※ 前の章……………問題文として取り上げた部分の一つ前の章で、自分の声を録音して分析した女性の例をあげている。この人は話している時に「嘘っぽい」、「相手を馬鹿にしているみたいな」声を出しており、話したあとは相手を困らせたわけでもないのに罪悪感がある、と語っている。
- ※ 甲本ヒロトさん……………（一九六三）ロックミュージシャン。筆者は前の章で、彼の歌声の魅力について語っている。
- ※ 旧皮質……………大脳の最も深いところにあり、危険を察知したり、人間の「本能」や、「情動（一時的で急激な心の動き）」と深く関わっている部分のこと。
- ※ 大脳辺縁系……………「旧皮質」の他に、「古皮質」と言われる部分も含んだ、大脳の部分のこと。

問一 ① 過言 ② 屋外 ③ ケイコク ④ キカン の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直しなさい。

問二 ① 1 ② 4 にあてはまる言葉として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。
ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア しかし イ たとえば ウ では エ あるいは オ だから

問三 A その土台ができた とは、どのようなことですか。本文中の言葉を使って、三十字以内で答えなさい。

問四 B その声は多くの場合、その人の良いところが失われていたり、作り声であつたりします とありますが、どうしてそうなるのですか。これより前の部分から読み取って、七十字程度で答えなさい。

問五 C 録音した自分の声を嫌だいやなと思う とありますが、筆者はその理由をどのように述べていますか。簡潔に二つ述べなさい。

問六 D 恒常性に反したことをしてでも社会に適応しなくてはなりません とありますが、人は社会に適応するためにどのようなことをするのですか。その内容が簡潔に示されている部分を、本文中から三十字でぬき出して書きなさい。

問七 E 罪悪感 とありますが、この女性は何に対して「罪悪感」を感じているのですか。本文中のこれより前の部分から、「～こと。」につづくような形で、二十五字以内でぬき出して書きなさい。

問八 本文における筆者の考えと合っているものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 恒常性は人間の尊厳に関わり、他の動物には見られない性質である。

イ 「本物の声」は、身体面でも心理面でも我慢し続けた成果として表れる。

- ウ 「声の力を活かす」とは、周囲に適応して様々な声を使い分けることである。
- エ 自分の声に違和感を覚えるのは、周りの人に対する罪悪感があるためである。
- オ 心身の恒常性にもとづく声の真実性は、自分ばかりか他者にも影響を与えている。

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

まさかこれほどビビッドな反応が返ってくるとは。凧が志望している企業が東京都内の菓子メーカーと知ったとき、入社案内のパンフレットを置いたコーヒーテーブルの向こう側で、母親が泣き出した。父に至っては凧の i 説明の言葉を憤りの表情で遮って、「もういいから、考え直しなさい」と言ったとき、まるで A 凧の意思表示など無かったかのように、新聞を読み始めた。凧は何がなんだか分からない真つ白な頭のまま、テーブルの上のパンフレットを片づけ始めたが、次第に顔が熱くなり、涙が目頭にふくれ上がってき

て「私はあきらめへんから」と一言つぶやくと、居間から ii 足取りで出て行った。

一体何が起こった？

ついさっきまで両親はにこにここと、凧の就職先について話していた。綾香のときは就職氷河期で新入社員を取る枠自体が少なくて大変やったけど、凧の場合は大丈夫そうやね、と母は言い、教授が良い就職先を紹介してくれそうやねんと凧が言うと、それは良かったな、凧が院でがんばってた成果やな、と父も誉めてくれていたではないか。しかし紹介してもらおう先が東京だと伝えると、居間の空気が一気に凍りついた。凧も薄々、京都を離れて遠い地へ行くと言いつい出せば物議を醸す気がして、いままで一言も別天地へ移りたい心持ちでいると両親に言ったことはなかったが、ここまで B ①刀 ②断に拒否されるとは思っていなかった。

志望理由さえ聞かれなかった。凧は自室の机に伏して、結局両親が表紙すら見なかったパンフレットを抱きかかえながら涙を垂らした。院に入ったところから二年後には上京して就職したいと考え、バイオの研究を頑張ってきた。教授も認めてくれて、どちらかと言えばイレギュラーな形で大手の菓子メーカーへの就職を斡旋してもらえなくなったのに。

家族と離れたいから遠い就職先を選んだのではないのに。なにも海外に ① エイジユウを決めたとか京都には二度と帰ってこないと言言したわけではない、同じ日本国内の首都に仕事しに行きたいと言っただけで、親に泣かれてしまった。元来奥沢家は保守的などころがあつて、父と母も幼なじみ同士のご近所で結婚したし、親戚もほとんど京都か他の関西圏で、上の二人の姉も京都の外で就職したいと言言い出さなかった。

子どものころは休みに入ると家族でさまざまな場所へ旅行に行き、東京デイズニerlandへも三度ほど出かけたが、どこへ出かけても家へ帰ってくると両親は「やっぱり家が一番や」と言い合いほっと一息つくのが定着していた。二人がこの土地に愛着があるのも、子ど

もを大切に育ててきたのもよく分かる。しかし出て行くとなるとここまで拒否反応を示すのは異常としか思えない。

〈中略〉

洗面台で顔を洗い、タオルで拭いていたら、いつの間にか後ろに父が立っているのが鏡に映っていた。

「三人で話してたらついお母さんも凜も興奮してしまいうる。やから今ここでちょっと聞きたいんやが、お父さんにはどうしても分からへんことがあるんや。お前はなんでそこまで東京へ行きたいんや？」

確かに三人で話しているとケンカ腰になり、思っていたよりもどんどん話が過激な方向へ行くなとは思っていた。父と二人だけで話せるのは良いかもしれない。でもここは洗面所で、そばの洗濯機は稼働中で、水の渦巻く音が響き渡っている。母がいないからってこんな場所ですごいな話を始めるところが、いかにも父らしい。

「もちろん、私が働きたいと思ってる企業っていうのは、関東圏に拠点が集中しているから、っていうのが第一の理由としてある。でもそやな、ほかに理由があるとすれば……。なんか、今を逃したら京都から一生出られへん気がして、それが息苦しいねん。家族に止められるから出られへんと思ってるわけじゃないで。私は山に囲まれた景色のきれいなこのまちが大好きやけど、同時に内へ内へとパワーが向かっていって、盆地に住んでいる人たちをやさしいバリアで覆って離さない気がしてるねん」

② 訳の分からないことを言い出すな、と言われるかと思ったら、父は特に驚きもせず頷いた。

「凜は京都の歴史を背負ってゆくのに疲れたんちゃうか。この家のあたりの土地も、長い年月のなかでほんま色々あった場所やし。お前はお姉ちゃんたちより敏感なところがあったからなあ、子どものころから。確かに京都は、よく言えば守られてるし、悪く言えば囲まれてる土地や」

父が当たり前のように自分の言った言葉の意味を理解して返答してくる事実には、凜は驚きを隠せなかった。こんな話は、いままで親子間で一度もしたことがなかったのに。自分でもうまく伝わるか自信がないほど抽象的な言葉を並べているのに、ちゃんと意思疎通ができてる。

「東京なんてもちろん、ほかのどの県だって、電車が新幹線に乗ればすぐに行けるやんか。道路が封鎖されてるわけでもない、旅行だろうが引越しようが、動こうと思えばいつでも動けるやん。でも私は旅行でなら他の土地に行けても、いざ完全に出て行くって決めたときは、簡単にはここから出られへんって感じがする。見えない力で、出ようとしても、やさしく押し戻される。もしくはちょっと出て

行けても、[※]そろそろ帰ってき^ゞっていうメッセージを乗せた不思議な優しい風が京都方面から吹^ふいてきて、ハッと気が付いたら舞^まい戻^もっている予感がする」

「確かに父さんも、長年住んでる京都特有の力は感じることはあるな。出張で別の場所からここへ帰ってくると、妙^{みまう}に iii 気分になる。自分の故郷に帰ってきたからほっとしてる、だけが理由やない、京都の風に身体を洗われる感覚があるな。父さんはユーレイなんか見えたことないし、オカルトとかスピリチュアル的なもんもよう分からんタイプやけどな。あんまり詳^{くわ}しくないけど、京都には平安京の時代から、東西南北に守り神がいるっていうやんか。あの神様たちがほんまに存在して京都を守つてるとまでは思わへんけど、な^んや昔の人が言^いいたかつたことは分かるわ。あれは多分、昔の人が ^③アみ出した上^う手^まい^ゞたとえ^ゞや。あえて言うならああい^いう神様に近いもんが京都を守つてるんや。都を作るときに風水を参考にしたから土地に力が宿^すつた、つてことになつてるけど実は逆で、もともと ^E力の宿りやすい地形のこの場所が、風水の教えとうまくび^びつたり合^あつたんとちゃうんかなあ。人の力以上のもんを感じるわ」

〈 中 略 〉

「父さんが分かつてくれてよかった。今は破れ目にみたいな穴が開いててそこからはなんとか抜^ぬけ出^でせそうなんやけど、年々その穴がどんどん小さくなつていくのが分かるねん。もう急[※]いで飛^とび出^でさな完全に閉^しじて、穴があつたかどうかさえ分からなくなるほど継^つぎ目なく、どんどん閉^しまつていく気がするんよ」

凜の口調が段々熱を帯びてきたのとは反対に、父親は物^{もの}憂^{うれ}げな表情になった。

「凜の気持ちは分からんでもないけど、やつぱり諸[※]手^{もうて}を上げて賛成はできひんわ。いまは出ていきたくてしょうがなくても、もういくらかすればこの土地の色んな部分が平気になつてくると思うねん。年齢的などころは大きいはずや。いい意味で受け入れられるようになってくるさかいな。それまで待たれへんか」

「待たれへん。待つたら、私のなかの大切ななにかが死ぬ気がする」

もとから自分の考えをわかつてもらえらると思つていなかつたという風に、父は凜の言葉を特に顔色も変えずに受け止め、頷^{うなづ}いた。

「まあ、しゃあないな。この件に関しては、なかなかすぐに分かり合^あうのはむづかしいわ。今日はいっぱい話^たしてお互^{たが}い疲^{つか}れたな。とりあえずそろそろ寝^ねよか」

分かった、と返事した凜だったが、気持ちが高ぶっているし、まだ時間も早いしで眠れそうになかった。

〈綿矢りさ『手のひらの京』(新潮文庫)より〉

〔語注〕

- ※ 綾香……………凜の姉。すでに就職し、社会人となっている。
- ※ 就職氷河期……………就職が大変難しい時期。
- ※ 院……………大学院。
- ※ 物議を醸す……………言い争いのもととなる。
- ※ 別天地……………今とは異なる理想的な世界。
- ※ イレギュラーな……………特別な。
- ※ 意思疎通……………考えを伝え理解し合うこと。
- ※ そろそろ帰ってき……………関西弁で「そろそろ帰っておいで」という意味。
- ※ 風水……………都市、城、住居、墓などの位置を定めることに用いられてきた中国の思想。
- ※ 飛び出さな……………関西弁で「飛び出さない」という意味。
- ※ 諸手を上げて……………積極的に。

問一 エイジユウ ① 訳 ② アミ ③ のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 i iii に入る言葉としてもっともふさわしいものをア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。
ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア 清々しい すがすが イ ただたしい ウ こうごうしい エ 荒々しい オ けばけばしい

問三 A 凜の意思表示 の内容を具体的に述べているところを本文中からぬき出して答えなさい。字数は九字とします。

問四 B ① 刀 ② 断 は「さっぱりとことをなすとげるさま」を表す熟語です。①、②に入る漢字を次のア～カの中から一字ずつ選び、記号で答えなさい。

ア ニ イ 両 ウ 石 エ 刀 オ 鳥 カ 一

問五 C 拒否反応 とは父や母のどのような反応を言っているのでしょうか。「父」と「母」それぞれの反応を、あわせて四十字以内で書きなさい。

問六 D いかにも父らしい とありますが、文中から読み取れる「父」について述べたものとして、もっともふさわしいものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 頭の回転の速さが裏目に出て、娘の進路についても理屈で説得しようとするが上手くいかずいらだっている。

イ 意思疎通ができなかった娘の成長に驚きつつ、自分の経験から、なんとか娘を思いとどまらせようと考えている。

ウ 娘を心配するあまり場所もわきまえずに議論を始め、その考えがいかにあやまっているか分からせようと熱弁をふるっている。

エ 率直で自由な感覚を持ち、娘に共感する部分もあるが、一心に思いつめる娘の若さにはあやうさを感じずにはいられない。

オ 妻のことも娘のことも同じように大切に思っており、どちらに味方をするか決めかねて、困惑してしまっている。

問七 E 力の宿りやすい地形とありますが、これは京都の地形のどのような特徴とくちょうを言っているのですか、答えなさい。

問八 「凜」は京都という土地に対してどのような思いを持っていますか。五十字以上六十字以内でまとめて書きなさい。

* 国語の問題はこれで終わりです。 *
